

第55回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

いのち

長野県 中野市立南宮中学校 一学年

内田 幸杜

ぼくの親友は昨年十一歳で天国に旅立った。その子はクラスでもすぐ元気な子だった。地区子供会の会長をやっていたぼくを、その子は副会長としていつも助けてくれた。地区のお祭りは最高に盛り上がった。最後の運動会では放送係をやっていて大活躍をした。

運動会の次の日、その子は熱を出し、学校を休んだ。そしてただの風邪だったのに、その子は二度と学校に来ることはなかった。

先生は誰でもなるかもしれない病気だと言った。近くの病院ではなく遠い大きな病院のICUに入ったままだったから、お見舞いにも行けなかった。何度も何度も大きな手術をした。『学校に行きたい』『みんなにあいたい』と最後まで願いながら。そんな普通のことすらかなわないまま、その子は天国に旅立った。ぼくはそのことを知った時、意味がわからなかった。理解できないし、理解したくなかった。でも、ぼくはその子から“いのちの尊さ”を教えてもらった。“生きていく”って当然ではないことを教えてもらった。そして誰もが突然、病気やケガにあらうことがあるってことがわかった。

また、支える家族には精神的、経済的、体力的に負担をかけてしまうことを知った。本人だけでなく、支える家族も同じように病気と闘っていたことを知った。

そんな時のために生命保険がある。生命保険に入っていたら、家族の経済的な負担が少し減ることになる。家族の負担が少しでも減れば、その分本人に寄り添えたり、励ましたりできると思う。

いつなるかわからない病気やケガのために生命保険で毎月お金を払うのはもったいないと思う人もいるかもしれないけど、そのおかげで助かっている人も多いと思う。生命保険に入っていれば、病気やケガをしても少しは安心だと思えるはず。いつなっても不安にならないためのお守りみたいな感じだとぼくは思う。生命保険で安心を買っている人も多いと思う。まだ骨折で二回しか使ったことがないけど、僕ももしものための生命保険で安心を買った一人だ。